

東日本大震災からの記憶や教訓の伝承方法を考える第3回「全国被災地語り部シンポジウム in 東北」が2月25日、宮城県南三陸町のホテル観洋で開かれた。震災から7年、風化を懸念する声や防潮堤などの復興工事が進みまち並みの景観が大きく変貌を遂げるなか、国内外から約400人が参加。震災の経験と教訓を国際的に普遍化する方策や後世に伝える伝承方法を語り合った。1部はパネルディスカッション、2部では三つの分科会で意見を交換した。

実行委員長の阿部隆二郎氏（南三陸町地域観光復興協議会会長）は「確実に震災の風化が進んできていると感じている。今回のシンポジウムの趣旨は『震災の風化を防ぎ、教訓を次世代に伝える』こと。また、もの言わぬ語り部の震災遺構の存在価値を考えると同時に、『KATARIBE（語り部）』が世界標準語と



第3回全国被災地語り部シンポジウム in 東北
KATARIBE 安全なまちづくりと震災遺構のゆく「被災地」を未来へ

シンポジウムには約400人が参加、後世に伝える伝承方法などを語り合った

は、柳井雅也・東北学院大

教授が時間とともに風化は必ず進み、語り部の役割にも工夫が必要だと指摘。「そのためには行動することが大事」と言及した。

岩手県宮古観光交流協会の学ぶ防災ガイドの元田久美子さんは、これまで多くの方に津波の経験を語ってきたことを振り返り「話をしていく間に強くなってきた。定住人口が伸びない現状では、交流

全国被災地語り部シンポ ホテル観洋で開催 国内外から400人参加

自責の念を涙ながらに訴え、教訓を語ることは命あるもの使命と強調した。

熊本県益城だいきろプロジェクト・きままに代表理事の吉村静代さんは「明るいコミユニティづくりと、避難所より車中泊が多くエコノミー症候群の発症に気を遣った。これからは次世代に震災を伝えるため学習をしていきたい」と意気込みを語った。

外国人特派員協会理事のメリー・コーベットさんは「大震災の1時間後には世界中から取材申し込みが殺到。義援金の申し込みもすぐ始まったが、届け先が不明確で検証する必要がある。人類の震災の歴史として残すためにもKATARIBEの伝承は不可欠」と言及した。

失われた」と事例を紹介。「風化を防ぐために果たした観音講での昔語りを通して語り部の重要性を説いた。

「普遍性・持続性のある震災伝承と震災遺構」をテーマにしたパネルディスカッションで

「未来への伝承」と妻を助けることができなかった

「普遍性・持続性のある震災伝承と震災遺構」をテーマにしたパネルディスカッションで

「未来への伝承」と妻を助けることができなかった

全国被災地語り部 南三陸宣言

私たち「被災地語り部」は国内外から、東日本大震災被災地、宮城県南三陸町に集い、2月25日、26日の2日間、各地での取組みと課題、未来を語り合いました。

私たちは、語り部の英知、人知を共有することで、「誰もが語り部」「もの言わぬ語り部（災害遺構）」がともに重要であると認識しました。

閉会にあたり、シンポジウムで得た知見を広く発信し、次世代、未災地へ教訓を伝え、ともに「未来知」をつむぎだすことを宣言します。

- 1、世界各地で起こる災害から命を守るため、日本の災害の経験、知識を伝え、さらに海外の経験を守り、「KATARIBE（語り部）」を世界共通語にします。活動や情報発信（ホームページ等）を多言語化したします。
- 2、私たちは語り部の知識を知恵に変え、多様な場を作ります。第二の語り部を育成し、語り部の話を身近な人に伝えてもらいます。
- 3、語り部は1人ひとりの命を守るために責任と学ぶ姿勢を持ち、自立心を養い続けます。

これまで3回のシンポジウムで広がったゆるやかなネットワーク、仲間づくりの場としての被災地語り部シンポジウムを継続します。

第3回全国被災地語り部シンポジウム in 東北
南三陸ホテル観洋において 2018年2月26日

このほか、南三陸町の震災遺構の高野会館、防災庁舎や震災遺構に決まった大川小の視察、復興トーク&ドキュメンタリー上映会や和歌山県広

川町の稲むらの火を題材とした浪曲の披露など、最後に延べ12時間にわたるシンポジウムを総括、「語り部宣言」を行った。今回は熊本で開催。